

「便所虫」という言葉は何を指すのか？ - Google 画像検索を活用した文化昆虫学的観点からの研究

高田 兼太¹⁾

文化昆虫学は、文化事象に表象する昆虫を調査し、人々に対する昆虫（あるいは虫）の影響や昆虫に対する人々の認識について研究する学問分野である。文化昆虫学が範疇とする文化事象はきわめて多岐にわたるが、その中には言語も含まれる (Hogue, 1987)。よって、昆虫に関連する方言や俗語に関する問題は、文化昆虫学の課題として取り扱うことができる (高田, 2013)。特に俗語は、社会の世相を反映している言葉であることが多く、その調査から人と昆虫との関係性、あるいは人々がどのように昆虫とその多様性を認識しているのかが見えてくると思われる。

日本では、便所によく現れる虫のことを「便所虫」と呼ぶことがある。「便所虫」は、もちろんリンネが築き上げた西洋科学（分類学）に基づいた名称ではなく、また本草学の中で示されているような民族固有の分類体系に基づいた名称でもない。日本人の生活様式の中で漠然と使われる何らかの虫を指す俗語である。では、人々は一体どんな種類の虫を指して、便所虫と認識しているのだろうか？虫に対する人々の認識にかかわる素朴な疑問でありながらも、その実態は明らかではない。

そこで筆者は、「便所虫」の正体を明らかにするために、「便所虫」という言葉を Google で画像検索し、どんな虫の画像イメージが表示されるのかを調べた。（調査の様子を図 1 に示す）。検索により表示された頻度が高い虫ほど、「便所虫」を指し示すものとして一般的で

あると判断することが可能であると考えられるので、検索により表示された上位 40 件の虫のイメージを同定し、分類群ごとに頻度分布にまとめた。なお、対象としたのは生きものの写真のみであり、イラストや明らかに虫とは関係のないものについては除外した。

「便所虫」というキーワードで、2020 年 9 月 3 日 21 時ごろに Google 画像検索した結果、上位に表示された 40 件の虫のイメージを同定し、分類群ごとに頻度分布にまとめたものを図 2 に示す。調査の結果、検索された虫の画像イメージは 14 種であったが、検索された最も頻度が高かったのはカマドウマであり（8 件）、次いでワラジムシ（7 件）、ダンゴムシ（7 件）、チョウバエ（6 件）、ハエの仲間（種不明：4 件）の頻度が高かった。その他 10 種については、1 件しか検索されなかった。この調査結果からは、人々が「便所虫」として認識する虫は、概ねカマドウマ、ワラジムシ、ダンゴムシ、チョウバエであることが示唆された。「便所虫」と認定された虫は、いずれもジメジメした環境を好む生きもので、便所を連想させる虫としてふさわしい面々である。加えて、チョウバエを除くと、人為的環境にいれば大きくて目立つ種類でもある。

「便所虫」に属する生きものはいずれも家屋害虫であるが、ここで他の生活空間に応じた虫の俗語は存在するのかという疑問が自然と沸き上がる。家屋には、便所だけでなく、台所、居間、寝室など、生活用途に応じた空

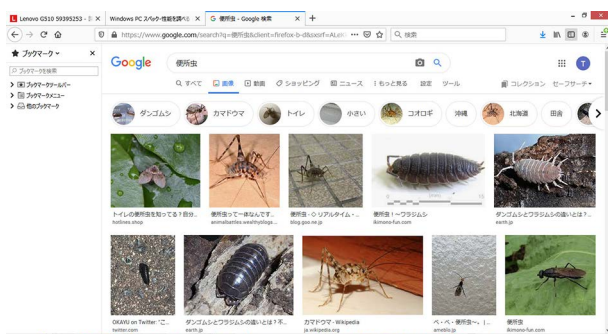


図 1 「便所虫」というキーワードで Google 画像検索を実施している様子。写真はもっとも上位に表示されたもの。

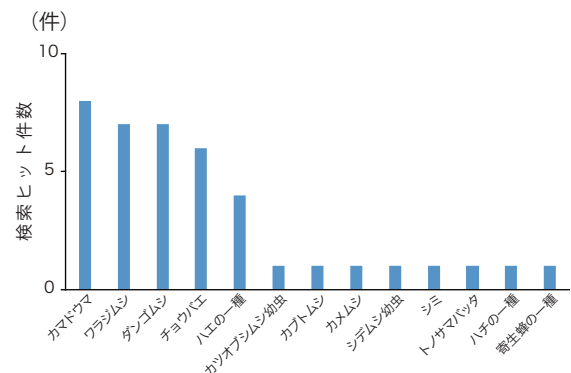


図 2 「便所虫」というキーワードで Google 画像検索によりヒットした上位 40 件の虫の種類（分類群）ごとの頻度分布。

¹⁾ Kenta TAKADA 島根県出雲市

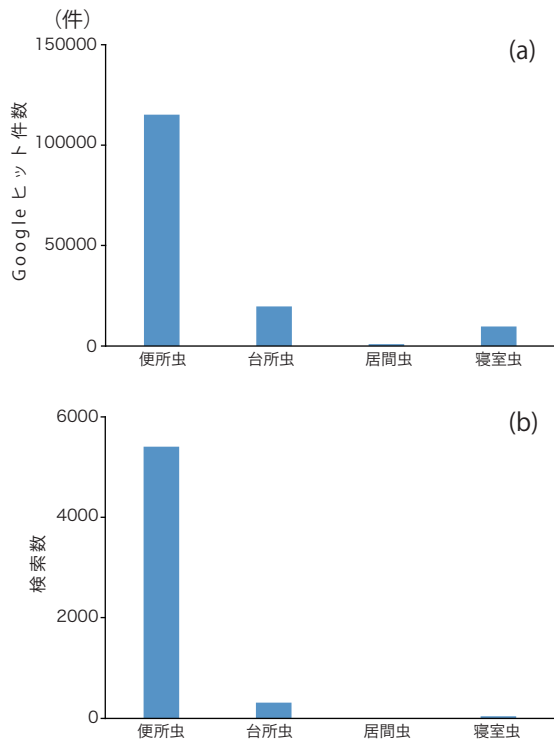


図3 家屋害虫の俗称の候補ごとの Google ヒット件数 (a) と検索数 (b). なお, 検索数は「Ubersuggest」を用いて調べた.

間が含まれる。殊に台所は、残飯など生きものの食料の宝庫であり、実際にゴキブリやコバエなどが発生しやすい場所である。その証拠に、ホームセンターなどでの家屋害虫駆除グッズでも、ゴキブリやコバエ対策用品が多い。したがって、「台所虫」といった言葉が世に広まっても不思議ではないはずである。そこで、Google 完全一致検索機能を使って、「便所虫」「台所虫」「居間虫」「寝室虫」というキーワードを検索し、ヒット件数を調べてみるとともに、検索数（検索エンジンにより特定のキーワードが検索された回数）を Ubersuggest (<https://neilpatel.com/jp/ubersuggest/>) にて調べてみた(2020年9月17日4時30分ごろに実施)。その結果、これらの中でも、「便所虫」をキーワードとした場合のヒット件数、検索数が、ともに圧倒して高かった(図3)。ここからは、家屋害虫の中でも、「便所虫」という言葉が、俗語としていかに一般的なかがうかがえる。おそらく、虫は住居という空間においては、ある意味で生活空間を脅かす侵略者であるとともに、不衛生であることを象徴していると思われる。人々は、台所や居間、寝室は虫と関連付けたくはないが、どこか不衛生なイメージのある便所なら構わない、あるいは虫に侵略されても仕方がないと思っているのかもしれない。

しかしながら、現在使われている「便所虫」という言葉は、絶滅の一途をたどっているのかもしれない。現在の家屋では、外的環境から遮断され、十分に整備されたトイレが多くなっており、「便所生態系」は急速に失

われつつある。実際に調査をしたわけではないが、人々が便所で虫を見る機会が、かつてより減少してきているのではないだろうか？現象が、実際に観察される機会を失うと、同時にそれらを指し示す言葉は失われていくものである。方言などでもそうであるが、身近な存在であるからこそ、それを指し示す言葉は生き残る(高田2013)。ただし、家屋に限らず言えば、公衆便所などではまだ整備が整っておらず、また外界から遮断されていないところも多く、しばらくは「便所虫」という言葉は失われたいと思われる。実際に、筆者は2020年9月28日に、出雲市にある一の谷公園に設置された公衆便所を見回ったが、便所虫の代表格であるダンゴムシが観察された。一の谷公園の公衆便所は、整備もきちりとされており、また清掃もしっかりとされており清潔感が保たれているが、外部環境とつながっており、周辺の自然環境が比較的豊かなために、ダンゴムシが観察できたのであろう(ちなみに、以前この公衆便所でノコギリクワガタのメスを見かけたことがある)。すでに肌寒い季節で乾燥していたので、梅雨の季節などはもっと色々な便所虫が観察できるのかもしれない。しかしながら、よく考えると、「便所生態系」が「保全」され、「便所虫」という言葉が生き残ってほしいと思う反面で、衛生面において便所が十分に整備されてほしいという欲求もあり、どこか複雑な心境に陥るものである。

本報告文では、検索エンジンやそれにまつわる統計量を使って昆虫にまつわる俗語を分析するという新しい試みを実施した。「便所虫」のように生活の中で漠然と使われ、実際にどの虫を指すのかが曖昧な言葉の分析や昆虫の誤認識の分析などには有効な手段だと思われる。「カブトムシ」や「トノサマバッタ」など、「便所虫」とはあまりにも無関係な昆虫までもが検索されている現状を考えると、分析には十分な注意が必要であるかもしれないが、それぞれの虫が検索された頻度を分析し、頻度が高いもののみを抽出するという方法をとることで、概観をとらえることができると考えられる。今後も、この手法により俗語や方言などの分析を実施し、本分析方法の有効性を確認するとともに、問題点を洗い出しながら改善を図り、より精度の高い分析方法を確立していきたいと考えている。

引用文献

- Hogue, C. L., 1987. Cultural entomology. *Annual Review of Entomology* 32:181-199.
- 高田兼太, 2014. ハサミムシの不名誉な俗称. *きべりはむし*, 36 (1): 20-22.